

# 半七捕物帳

猫騒動

岡本綺堂

青空文庫



半七老人の家には小さい三毛猫が飼ってあった。二月のあたたかい日に、私がぶらりと訪ねてゆくと、老人は南向きの濡縁ぬれえんに出て、自分の膝の上にうづくまつている小さい動物の柔らかそうな背をなでていた。

「可愛らしい猫ですね」

「まだ子供ですから」と、老人は笑っていた。「鼠を捕る知恵もまだ出ないんです」

明るい白昼まひるの日が隣りの屋根の古い瓦を照らして、どこやらで猫のいがみ合う声がやかましく聞えた。老人は声のする方をみあげて笑った。

「こいつも今にああなつて、猫の恋とかいう名を付けられて、あなた方の発句ほっくの種になるんですよ。猫もまあこの位の小さいうちが一番可愛いんですね。これが化けそうに大きくなると、もう可愛いどころか、憎らしいのを通り越して何だか薄気味が悪くなりますよ。むかしから猫が化けるということをよく云いますが、ありやあほんとうでしようか」

「さあ、化け猫の話は昔からたくさんありますが、嘘かほんとうか、よく判りませぬね」

と、わたしはあいまいな返事をして置いた。相手が半七老人であるから、どんな生き証  
拠をもつていないとも限らない。迂濶にそれを否認して、飛んだ揚げ足を取られるのも口  
惜しいと思つたからであつた。

しかし老人もさすがに猫の化けたという实例を知っていないらしくあつた。彼は三毛猫を  
膝からおろしながら云つた。

「そうでしょうね。昔からいろいろの話は伝わっていますが、誰もほんとうに見たとい  
者はないんでしょうね。けれども、わたしはたった一度、変なことに出つくわしましたよ。  
なに、これもわたしが直接に見たという訳じゃないんですけれど、どうも嘘じゃないらし  
いんです。なにしろ其の猫騒動のために人間が二人死んだんですからね。考えてみると、  
恐ろしいこつてす」

「猫に啖くい殺されたのですか」

「いや、啖くい殺されたというわけでもないんです。それが実に変なお話でね、まあ、聴い  
てください」

いつまでも膝にからみ付いている小猫を追いやりながら、老人はしずかに話し出した。

文久二年の秋ももう暮れかかつて、芝神明宮の生姜市しょうがいちもきのうで終つたという九月二十二日の夕方の出来事である。神明の宮地から遠くない裏店うらだなに住んでいるおまきという婆さんが頓死した。おまきは寛政申年生しんねい生まれの今年六十六で、七之助という孝行な息子をもつていた。彼女は四十代で夫に死に別れて、それから女の手ひとつで五人の子供を育てあげたが、総領の娘は奉公先で情夫おとこをこしらえて何処へか駆け落ちをしてしまった。長男は芝浦で泳いでいるうちに沈んだ。次男は麻疹はしかで命を奪とられた。三男は子供のときから手癖が悪いので、おまきの方から追い出してしまった。

「わたしはよくよく子供に運がない」

おまきはいつも愚痴をこぼしていたが、それでも末っ子の七之助だけは無事に家に残っていた。しかも彼は姉や兄たちの孝行を一人で引き受けたかのように、肩揚げのおりないうちからよく働いて、年を老とつた母を大切にした。

「あんな孝行息子をもつて、おまきさんも仕合わせ者だ」

子供運のないのを悔んでいたおまきが、今では却つて近所の人達から羨まれるようになった。七之助は魚商さかなやで、盤台ばんだいをかついで毎日方々の得意先を売りあっていたが、今年はたち二十歳になる若いものが見得も振りもかまわずに真つ黒になつて稼いでいるので、棒手振ぼてエぶ

りの小商いながらもひどい不自由をすることもなくて、母子おやこふたりが水いららずで仲よく暮らしていた。親孝行ばかりでなく、七之助は気のあらい稼業に似合わない、おとなしい素直な質たちで、近所の人達にも可愛がられていた。

それに引き替えて、母のおまきは近所の評判がだんだんに悪くなった。彼女は別に人から憎まれるような悪い事をしなかったが、人に嫌われるような一つの癖をもっていた。おまきは若いときから猫が好きであったが、それが年をとるにつれていよいよ烈しくなつて、この頃では親猫子猫あわせて十五六匹を飼っていた。勿論、猫を飼うのは彼女の自由で、誰もあらためて苦情をいふべき理由をもたなかった。そのたくさんの猫が狭い家いっぱいに群がっているのが、見る人の目には薄気味の悪いような一種不快の感をあたえることがあつても、それだけではまだ飼主に対して苦情を持ち込む有力の理由とは認められなかった。併したくさんの動物は決して狭い家の中にばかりおとなしくすく竦んではいなかった。彼等はそこらへのそのそ這い出して、近所隣りの台所をあらした。おまき婆さんが幾ら十分の食い物を宛あてがつて置いて、彼等はやはり盗み食いを止めなかった。

こうなると、苦情の理由が立派に成り立って、近所からたびたびねじ込まれた。その都度おまきも詫びた。七之助もあやまつた。併しおまきの家のなかの猫の啼き声はやはり絶

えないので、誰が云い出したとも無しに、彼女は近所の口の悪い人達から猫婆という綽名あだなを与えられてしまった。本人のおまきはともあれ、七之助は母の異名を聴くたびにいやな思いをさせられるに相違なかつた。が、おとなしい彼は母を諫めるいさことも出来なかつた。無論、近所の人と争うことも出来なかつた。彼は畜生の群れと一緒に寝て起きて、黙つておとなしく稼いでいた。

この頃は七之助が商売から帰つてくる時に、その盤台にかならず幾尾ひきかの魚さかなが残つていゝるのを、近所の人達が不思議に思つた。

「七之助さん、きょうもあぶれかい」と、ある人が訊いた。

「いいえ、これは家の猫うちに持つて帰るんです」と、七之助はすこし極りが悪そうに答えた。河岸かしから仕入れて来た魚をみんな売つてしまふ訳には行かない。飼え猫の餌食えしきとして必ず幾尾かを残して帰るように、母から云い付けられていると彼は話した。

「この高い魚をみんな猫の餌食に……。あの婆さんも勿体ねえことをするな」と、聴いた人もおどろいた。その噂がまた近所に広まつた。

「あの息子もおとなしいから、おふくろの云うことを何でも素直にきいているんだらうが、この頃の高い魚を毎日あれほどずつ売り残して来ちやあ、いくら稼いでも追いつくめえ。

あの婆さんは生みの息子より畜生の方が可愛いのかしら。因果なことだ」

近所の人達は孝行な七之助に同情した。そうして、その反動として誰も彼も猫婆のおまきに反感をもつようになった。近所から嫌われていたおまきが此の頃だんだんと近所から憎まれるようになって来た。猫はいよいよ其の反感を挑発するように、この頃はいたずらが烈しくなつて、どこの家でも遠慮なしには入り込んだ。障子を破られた家もあつた。魚を盗まれた家もあつた。その啼き声が夜昼そうぞうしいと云うので、南隣りの人はとうとう引つ越してしまった。北隣りには大工の若い夫婦が住んでいるが、その女房も隣りの猫にはあぐね果てて、どこかへ引つ越したいと口癖のように云っていた。

「何とかしてあの猫を追い払つてしまおうじゃないか。息子も可哀そうだし、近所も迷惑だ」

長屋のひとりが堪忍袋の緒を切つてこう云い出すと、長屋一同もすぐに同意した。直接に猫婆に談判しても容易に埒があくまいと思つたので、月つきばん番の者が家いえぬし主のところへ行つて其の事情を訴えて、おまきが素直に猫を追いはらえばよし、さもなければ店たなだて立を食わしてくれと頼んだ。家主ももちろん猫婆の味方ではなかつた。早速おまきを呼びつけて、長屋じゅうの者が迷惑するから、お前の家の飼ひ猫をみんな追い出してしまえと命令した。



もし不承知ならば即刻に店を明け渡して、どこへでも勝手に立ち退けと云った。

家主の威光におされて、おまきは素直に承知した。

「いろいろの御手数をかけて恐れ入りました。猫は早速追い出します」

しかし今まで可愛がって育てていたものを、自分が手ずから捨てにゆくには忍びないから、御迷惑でも御近所の人たちにお願ひ申して、どこかへ捨てて来て貰いたいと彼女は嘆いた。それも無理はないと思つたので、家主はそのことを長屋の者に伝えると、おまきの隣りに住んでいる彼<sup>か</sup>の大工のほかに二人の男が連れ立って、おまきの家へ猫を受け取りに行つた。猫は先頃子を生んだので、大小あわせて二十四匹になつていた。

「どうも御苦労さまでございます。では、なにぶんお願ひ申します」

おまきはさのみ未練らしい顔を見せないで、家じゅうの猫を呼びあつめて三人に渡した。その猫どもを三つに分けて、ある者は炭の空き俵に押し込んだ。ある者は大風呂敷に包んだ。めいめいがそれを小脇に引つかかえて路地を出てゆくうしろ姿を、おまきは見送つてニヤリと笑つた。

「わたしは見ていましたけれど、その時の笑い顔は実に凄うござんしたよ」と、大工の女房のお初があとで近所の人達にそつと話した。

猫をかかえた三人は思い思いの方角へ行つて、なるべく寂しい場所を選んで捨てて来た。「まずこれでいい」

そう云つて、長屋の平和を祝していた人達は、そのあくる朝、大工の女房の報告におどろかされた。

「隣りの猫はいつの間にか帰つて来たんですよ。夜なかに啼く声が聞えましたもの」

「ほんとうかしら」

おまきの家を覗きに行つて、人々は又おどろいた。猫の眷族けんぞくはゆうべのうちに皆帰つて来たらしく、さながら人間の無智を嘲るように家中いっぱいに啼いていた。おまきに訊いても要領を得なかつた。自分もよく知らないが、なんでもゆうべの夜中にどこから帰つて来て、縁の下や台所の櫺子窓れんじからぞろぞろと入り込んだものらしいと云つた。猫は自分の家へかならず帰るといふ伝説があるから、今度は二度と帰られないようなところへ捨てて来ようというので、かの三人は行きがかり上、一日の商売を休んで品川のはずれや王子の果てまで再び猫をかかえ出して行つた。

それから二日ばかりおまきの家には猫の聲が聞えなかつた。

神明の祭礼まつりの夜であった。おなじ長屋に住んでいる鑄掛錠いかけ前直しの職人の女房ななつが七歳になる女の児をつれて、神明のお宮へ参詣に行つて、四ツ（午後十時）少し前に帰つて来ると、その晩は月が冴えて、明るい屋根の上に露が薄白く光っていた。

「あら、阿母おつかさん」

女の児はなにを見たか、母の袂をひいて急に立ちすくんだ。女房もおなじく立ち停まつた。猫婆の屋根の上に小さい白い影が迷つていたのであつた。それは一匹の白猫で、しかも前脚二本を高くあげて、後脚二本は人間のようにつ立つているのを見た時に、女房もはつと息をのみ込んだ。かれは娘を小声で制して、しばらくそつと窺つていると、猫は長い尾を引き摺りながら、踊るような足取りで板葺屋根こけらの上をふらふらと立つてあるいた。女房はぞつとして鶏肌とりはだになつた。猫が屋根を渡り切つて、その白い影がおまきの家の引窓のなかに隠れたのを見とどけると、彼女は娘の手を強く握つて転げるように自分の家へかけ込んで、引窓や雨戸を嚴重に閉めてしまった。

亭主は夜遅く帰つて来て戸をたたいた。女房がそつと起きて来て、今夜自分が見とどけ

た怪しい出来事を話すと、祭礼の酒に酔っている亭主はそれを信じなかった。

「べらぼうめ、そんなことがあるもんか」

女房の制めるのもきかずに、彼はおまきの台所へ忍んで行って、内の様子を窺っていると、やがておまきの嬉しそうな声がきこえた。

「おお、今夜帰って来たのかい、遅かったねえ」

これに答えるような猫の啼き声がつづいて聞えた。亭主もぎよつとして、酒の酔いが少しさめて来た。彼はぬき足をして家へ帰った。

「ほんとうに立って歩いたか」

「あたしも芳坊も確かに見たんだもの」と、女房も顔をしかめてささやいた。小さい娘のお芳もそれに相違ないとふるえながら云った。

亭主もなんだか薄気味が悪くなって来た。ことに彼は猫を捨てに行つた一人であるだけに、いよいよ好い心持がしなかつた。彼はまた酒を無暗に飲んで酔い倒れてしまった。女房と娘とはしつかり抱き合つたままで、夜のあけるまでおちおち睡られなかつた。

おまきの家の猫はゆうべのうちにみな帰っていた。ことに鑄掛屋の女房の話の聴いて、長屋じゅうの者は眼をみあわせた。普通の猫が立つてあるく筈はない、猫婆の家の飼猫は

化け猫に相違ないということに決められてしまった。その噂が家主の耳へもはいったので、彼も薄気味が悪くなった。彼は再びおまき親子にむかつて立ち退きを迫ると、おまきは自分の夫の代から住み馴れている家を離れたくない。猫はいかように御処分なすつても好いから、どうか店立たなだてをゆるして貰いたいと涙をこぼして家主に嘆いた。そうになると、家主にも不憫が出て、たつてこの親子を追い払うわけにも行かなかつた。

「ただ捨てて来るから、又すぐ戻つて来るのだ。今度は二度と歸られないように重量おもしをつけて海へ沈めてしまえ。こんな化け猫を生かして置くと、どんな禍いをするか知れない」

家主の発議で、猫は幾つかの空き俵に詰め込まれ、これに大きい石を縛りつけて芝浦の海へ沈められることになった。今度は長屋じゅうの男という男は総出になって、おまきの家へ二十四匹の猫を受け取りに行った。重量をつけて海の底へ沈められては、さすがの猫ももう再び浮かび上がれないものとおまきも覚悟したらしく、人々にむかつて嘆願した。

「今度こそは長ながの別れでございますから、猫に何か食べさせてやりとうございます。どうぞ少しお待ち下さい」

彼女は二十四匹の猫を自分のまわりに呼びあつめた。きようは七之助も商売を休んで家にいたので、おまきは彼に手伝わせて何か小魚こぎかなを煮させた。飯と魚とを皿に盛り分けて、

一匹ずつの前にならべると、猫は鼻をそろえて一度に食いはじめた。彼等は飯を食った。肉を食った。骨をしゃぶった。一匹ならば珍らしくない、しかも二十匹が一度に喉を鳴らし、牙をむき出して、めいめいの餌食を忙がしそうに啖くわっているありさまは、決して愉快な感じを与えるものではなかった。気の弱いものにはむしろ凄ものすごい愴くわいようにも思われた。白髪しらがの多い、頬骨の高いおまきは、伏目にそれをじっと眺めながら、ときどきそつと眼を拭いていた。

おまきの手から引き離された猫の運命は、もう説明するまでもなかった。万事が予定の計画通りに運ばれて、かれらは生きながら芝浦の海の底へ葬られてしまった。それから五、六日を経つても猫はもう帰って来なかった。長屋じゅうの者はほつとした。

併しおまきは別にさびしそうな顔もしていなかった。七之助は相変らず盤台をかついで毎日の商売に出ていた。その猫を沈められてから丁度七日目の夕方におまきは頓死したのであった。

それを発見したのは、北隣りの大工の女房のお初で、亭主は仕事からまだ帰って来なかったが、いつもの慣習なづかいで彼女は格子に錠をおろして近所まで用達に行った。南隣りは当時空家あきやであった。したがって、おまきの死んだ当時の状況は誰にも判らなかったが、お初の

云うところによると、かれが外から帰って来て、路地の奥へ行こうとする時に、おまきの家の入口に魚の盤台と天秤棒とが置いてあるのを見た。七之助が商売から戻って来たものと推量した彼女は、その軒下を通り過ぎながら声をかけたが、内には返事がなかった。秋の夕方はもう薄暗いのに、内には灯をともしていなかった。暗い家のなかは墓場のように森と沈んでいた。一種の不安に襲われて、お初はそつと内をのぞくと、入口の土間には人がごろげているらしかった。怖々ながら一と足ふみ込んで透かして視ると、そこに転げているのは女であった。猫婆のおまきであった。お初は声をあげて人を呼んだ。

その叫びを聞き付けて近所の人も駆けて来た。猫婆が死んだという噂が長屋じゆうから裏町まで伝わって、家主もおどろいて駆け付けた。一と口に頓死というけれど、実際は病気で死んだのか、人に殺されたのか、それがまだ判然しなかった。

「それにしても息子はどうしたんだろう」

盤台や天秤棒がほうり出してあるのを見ると、七之助はもう帰って来たらしいが、どこに何をしているのか、この騒ぎのなかへ影を見せないのも不思議に思われた。ともかくも医者を呼んで来て、おまきの死骸をあらためて貰うと、からだに異状はない、頭の脳天よりは少し前の方に一カ所の打ち傷らしいものが認められるが、それも人から打たれたのか、

あるいは上がり端はなから転げ落ちるはずみに何かで打ったのか、医者にも確かに見極めが付かないらしく、結局おまきは卒そつちゆう中で倒れたということになった。病死ならば別にむずかしいこともないと、家主もまず安心したが、それにしても七之助のゆくえが判らなかつた。

「息子はどうしたんだろう」

おまきの死骸を取りまいて、こうした噂が繰り返されているところへ、七之助が蒼い顔をしてぼんやり帰つて来た。隣り町ちように住んでいる同商売の三吉という男もついて来た。三吉はもう三十以上で、見るからに気の利いた、威勢の好い男であつた。

「いや、どうも皆さん。ありがとうございました」と、三吉も人々に挨拶した。「実は今、七之助がまつ蒼になつて駆け込んで来て、商売から帰つて家へはいると、おふくろが土間に転がり落ちて死んでいたが、一体どうしたらよからうかと、こう云うんです。そりや俺のところまで相談に来ることはねえ、なぜ早く大屋おおやさんやお長屋の人達にしらせて、なんとか始末を付けねえんだと叱言こいことを云つたような訳なんです、なにしろまだ年が若けえもんですから、唯もう面喰らつてしまつて、夢中で私のところへ飛んで来たという。それもまあ無理はねえ、ともかくもこれから一緒に行つて、皆さんに宜しくおねがい申してや



ろうと、こうして出てまいりましたものでございますが、一体まあどうしたんでございませうね」

「いや、別に仔細はない。七之助のおふくろは急病で死にました。お医者 of 診断では卒中だということ……」と、家主はおちつき顔に答えた。

「へえ、卒中ですか。ここのおふくろは酒も飲まねえのに、やっぱり卒中なんぞになりましたかね。おつしやる通り、急死というのじゃあどうも仕方がございませぬ。七之助、泣いてもしようがねえ、寿命だとあきらめろよ」と、三吉は七之助を励ますように云った。

七之助は窮屈そうにかしこまって、両手を膝に突いたままで俯向いていたが、彼の眼にはいつぱいの涙を溜めていた。ふだんから彼の親孝行を知っているだけに、みんなも一ひとし入おのあわれを誘われた。猫婆の死を悲しむよりも、母をうしなつた七之助の悲しみを思いやつて、長屋じゅうの顔は陰つた。女たちはすすり泣きをしていた。

その晩は長屋じゅうの者があつまつて通夜をした。七之助はまるで気抜けがしたようにぼんやりとして、隅の方に小さくなつてゐるばかりで碌々口も利かなかつた。それがいよいよ諸人の同情をひいて、葬とむらい式一切のことは総て彼の手を煩わさずに、長屋じゅうの者がみんな始末してやることにした。七之助はおどおどしながら頻りに礼を云った。

「こうして皆さんが親切にして下さるんだから、何もくよくよすることはねえ。猫婆なんというおふくろは生きていねえ方が却って好いかも知れねえ。お前もこれから一本立ちになつてせいぜい稼いで、みなさんのお世話で好い嫁でも持つ算段をしろ」と、三吉は平気で大きな声で云つた。

仏の前で掛け構い無しにこんなことを云つても、誰もそれを咎める者もないほどに、不運なおまきは近所の人達の同情をうしなつていた。さすがに口を出して露骨には云われないが、人々の胸にも三吉とおなじような考えが宿つていた。それでも一個の人間である以上、猫婆は飼猫とおなじような残酷な水葬礼には行なわれなかつた。おまきの死骸を収めた早桶は長屋の人達に送られて、あくる日の夕方に麻布の小さな寺に葬られた。

それは小雨こよめのような夕霧の立ち迷つている夕方であつた。おまきの棺が寺へゆき着くと、そこにはほかにも貧しい葬式があつて、その見送り人は徐々に帰りがかかるところであつた。おまきの葬式は丁度それと入れ違いに本堂に繰り込むと、前に来ていた見送り人はやはり芝辺の人達が多かつたので、あとから来たおまきの見送り人と顔馴染みも少なくなかつた。

「やあ、おまえさんもお見送りですか」

「御苦労さまです」

こんな挨拶が方々で交換された。そのなかに眼の大きな、背の高い男がいて、彼はおまきの隣りの大工に声をかけた。

「やあ、御苦労。おまえの葬式とむれえは誰だ」

「長屋の猫婆さ」と、若い大工は答えた。

「猫婆……。おかしな名だな。猫婆というのは誰のこった」と、彼はまた訊いた。

猫婆の綽名の由来や、その死にぎわの様子などを詳しく聴き取って、彼は仔細らしく首をかしげていたが、やがて大工に別れを告げて一と足さきに寺の門を出た。かれは手先の湯屋熊であった。

### 三

「どうもその猫ばああの死に様がちつと変じやありませんかね」

湯屋熊の熊蔵はその晩すぐに神田の三河町へ行つて、親分の半七のまえできよう聞き出して来た猫婆の一件を報告した。半七は黙って聴いていた。

「親分、どうです。変じやありませんかね」

「むむ、ちつと変だな。だが、てめえの挙げて来るのに碌なことはねえ。この正月にもてめえの家の二階へ来る客の一件で飛んでもねえ汗をかかせられたからな。うっかり油断はできねえ。まあ、もうちつと掘ほじくつてから俺のそこへ持つて来い。猫婆だつて生きている人間だ。いつ頓死をしねえとも限らねえ」

「ようがす、わつしも今度は真剣になつて、この正月の埋め合わせをします」

「まあ、うまくやつて見てくれ」

熊蔵を帰したあとで、半七はかんがえた。熊蔵の云うことも馬鹿にならない、家主の威光と大勢の力とで、猫婆が生みの子よりも可愛がつていたたくさんの猫どもを無体にもぎ取つて、それを芝浦の海の底に沈めた。それから丁度七日目に猫婆が不意に死んだ。猫の執念とか、なにかの因縁とかいえば云うものの、そこに一種の疑いがないでもない。これはそそっかしい熊蔵一人にまかせては置かれなれないと思つた。彼はあくろ朝すぐに愛宕下の熊蔵の家をたずねた。

熊蔵の家が湯屋であることは前にも云つた。併し朝がまだ早いので、二階にあがつている客はなかつた。熊蔵は黙つて半七を二階に案内した。

「大層お早うござえましたね。なにか御用ですか」と、彼は小声で訊いた。

「実はゆうべの一件で来たんだが、なるほど考えてみるとちっとおかしいな」

「おかしいでしょう」

「そこで、おめえは何か睨んだことでもあるのか」

「まだ其処までは手が着いていねえんです。なにしろ、きのうの夕方聞き込んだばかりですから」と、熊蔵は頭を掻いた。

「猫婆がまったく病気で死んだのなら論はねえが、もしその脳天の傷に何か曰くがあると思えば、おめえは誰がやったと思う」

「いずれ長屋の奴らでしょう」

「そうかしら」と、半七は考えていた。「その息子という奴がおかしくねえか」

「でも、その息子というのは近所でも評判の親孝行だそうですね」

評判の孝行息子が親殺しの大罪を犯そうとは思われないので、半七も少し迷った。しかし猫婆がともかくも素直に猫を渡した以上、長屋の者がかれを殺す筈もあるまいと思われた。息子の仕業でも無し、長屋の者どもの仕業でもないと思えば、猫婆の死は医者の診断の通り、やはり卒中の頓死ということに決めてしまうよりほかはなかったが、半七の疑いはまだ解けなかった。いくら年が若いといつても、息子はもう二十歳はたちにもなっている。母

の死を近所の誰にも知らせないで、わざわざ隣り町の同商売の家まで駈けて行ったということが、どうも彼の腑に落ちなかった。と云って、それほどの孝行息子がどうして現在の母を残酷に殺したか、その理窟はなかなか考え出せなかった。

「なにしろ、もう一度頼んでおくが、おめえよく気をつけてくれ。五、六日経つと、おれが様子を訊きに来るから」

半七は念を押して帰った。九月の末には雨が毎日降りつづいた。それから五日ほど経つと、熊蔵の方からたずねて来た。

「よく降りますね。早速ですが例の猫ばばあの一件はなかなか当りが付きませんよ。息子は相変らず毎日かせぎに出ています。そうして、商売を早くしまつて、帰りにはきつとおふくろの寺参りに行っているようで、長屋の者もみんな褒めていますよ。それにね、長屋の奴らは猫婆が斃死くたばつて好い気味だぐらいに思っているんですから、誰も詮議をする者などはありません。家主だつて自身番だつて、なんとも思つていやあしませんよ。そういうわけだから、どうにもこうにも手の着けようがなくなつて……」

半七は舌打ちした。

「そこを何とかするのが御用じやあねえか。もうてめえ一人にあずけちやあ置かれねえ。」

あしたはおれが直接に出張つて行くから案内してくれ」

あくる日も秋らしい陰気な雨がしよぼしよぼ降つていたが、熊蔵は約束通りに迎いに来た。二人は傘をならべて片門前へ出て行つた。

路地のなかは思ひのほかにながかつた。まっすぐにはいると、左側に大きい井戸があつた。その井戸側について左へ曲がると、また鉤かぎの手に幾軒かの長屋がつづいていた。しかし長屋は右側ばかりで、左側の空地は紺屋こうやの干場ほしばにでもなつてゐるらしく、所まだらに生えてゐる低い秋草が雨にぬれて、一匹の野良犬が寒そうな顔をして餌をあさつてゐた。

「此処ですよ」と、熊蔵は小声で指さした。猫婆の南隣りはまだ空家になつてゐるらしい。二人は北隣りの大工の家へはいつた。熊蔵は大工を識つてゐた。

「ごめん下さい。悪いお天気です」

外から声をかけると、若い女房のお初が出て来た。熊蔵は框かまちに腰をかけて挨拶した。途中で打ち合わせがしてあるので、熊蔵はこの頃この近所へ引越して来た人だと云つて半七をお初に紹介した。そうして、今度引越して来た家はだいぶ傷いたんでゐるので、こつちの棟梁に手入れをして貰いたいと云つた。その尾について、半七も丁寧に云つた。

「何分こつちへ越してまいりましたばかりで、御近所の大工さんにだれもお馴染みがない

もんですから、熊さんに頼んでこちらへお願いに出ましたので……」

「左様でございましたか。お役には立ちますまいが、この後<sup>のち</sup>ともに何分よろしくお願い申します」

得意場が一軒ふえることと思つて、お初は笑顔をつくつて如才なく挨拶した。二人を無理に内に招じ入れて、煙草盆や茶などを出した。外の雨の音はまだ止まなかつた。昼でも薄暗い台所では鼠の駆けまわる音がときどきに聞えた。

「お宅も鼠が出ますねえ」と、半七は何気なく云つた。

「御覽の通りの古い家だもんですから、鼠があばれて困ります」と、お初は台所を見返つて云つた。

「猫でもお飼ひになつては……」

「ええ」と、お初はあいまいな返事をしていた。彼女の顔には暗い影がさした。

「猫といえは、隣りの婆さんの家はどうしましたえ」と、熊蔵は横合いから口を出した。

「息子は相変らず精出して稼いでいるんですか」

「ええ、あの人は感心によく稼ぎますよ」

「こりゃあ此処だけの話だが……」と、熊蔵は声を低めた。「なんだか表町の方では変な



噂をしているようですが……」

「へえ、そうでございますか」

お初の顔色がまた変った。

「息子が天秤棒でおふくろをなぐり殺したんだという噂で……」

「まあ」

お初は眼の色まで変えて、半七と熊蔵との顔を見くらべるように窺っていた。

「おい、おい、そんな詰まらないことをうっかり云わない方がいいぜ」と、半七は制した。「ほかの事と違つて、親殺しだ。一つ間違つた日にやあ本人は勿論のこと、かかり合いの人間はみんな飛んだ目に逢わなけりやあならない。滅多なことを云うもんじゃあないよ」

眼で知らされて、熊蔵はあわてたように口を結んだ。お初も急に黙ってしまった。一座が少し白らけたので、半七はそれを機しおに座を起つた。

「どうもお邪魔をしました。きようはこんな天気だから棟梁はお内かと思つて来たんですが、それじゃあ又出直して伺います」

お初は半七の家を訊いて、亭主が帰つたら直ぐにこちらから伺わせますと云つたが、半七はあしたまた来るからそれには及ばないと断わつて別れた。

「あの女房がはじめて猫婆の死骸を見付けたんだな」と、路地を出ると半七は熊蔵に訊いた。

「そうです。あの嬢、猫婆の話をしたら少し変な面つらをしていましたね」

「むむ、大抵判った。お前はもうこれで帰っていい。あとは俺が引き受けるから。なに、おれ一人で大丈夫だ」

熊蔵に別れて、半七はそれから他へ用達に行った。そうして、夕七ツ（午後四時）前に再び路地の口に立った。雨が又ひとしきり強くなつて来たのを幸いに、かれは頬かむりをして傘を傾けて、猫婆の南隣りの空家へ忍び込んだ。彼は表の戸をそつと閉めて、しめつぽい畳の上にあぐらを掻いて、時々天井裏へほとほと落ちて来る雨漏あまもりの音を聴いていた。くずれた壁の下にこおろぎが鳴いて、火の気のない空家は薄ら寒かった。

ここの家の前を通る傘の音がきこえて、大工の女房は外から帰って来たらしかった。

#### 四

それから又半晌ときも経つたと思う頃に、濡れた草鞋の音がこの前を通つて、隣りの家の門か

口どぐちに止まった。猫婆の息子が帰って来たなと思っていると、果たして籠や盤台を卸すような音がきこえた。

「七ちゃん、帰ったの」

お初が隣りからそつと出て来たらしかった。そうして、土間に立って何か息もつかずに囁ささやいているらしかった。それに答える七之助の声も低いので、どっちの話も半七の耳には聴き取れなかつたが、それでも壁越しに耳を引き立てていると、七之助は泣いているらしく、時々は涙はなをすすするような声が洩れた。

「そんな気の弱いことを云わないでさ。早く三ちゃんのところへ行つて相談しておいでよ。いいえ、もう一通りのことはわたしが話してあるんだから」と、お初は小声に力を籠こめて、なにか切りしきりに七之助に勧めているらしかった。

「さあ、早く行つておいでよ。じれつたい人だねえ」と、お初は渋っている七之助の手を取つて、曳き出すようにして表へ追いやつた。

七之助は黙つて出て行つたらしく、重そうな草鞋の音が路地の外へだんだんに遠くなくなった。それを見送つて、お初は自分の家へはいろいろとすると、半七は空家の中から不意に声をかけた。

「おかみさん」

お初はぎよつとして立ちすくんだ。空家の戸をあけてぬつと出て来た半七の顔を見た時に、彼女の顔はもう灰色に変わっていた。

「外じゃあ話ができねえ。まあ、ちよいと此処へは行ってくんねえ」と、半七は先に立つて猫婆の家へはいった。お初も無言でついて来た。

「おかみさん。お前はわたしの商売を知っているのかえ」と、半七はまず訊いた。

「いいえ」と、お初は微かに答えた。

「おれの身分は知らねえでも、熊の野郎が湯屋のほかに商売をもっていることは知っているだろう。いや、知っているはずだ。お前の亭主はあの熊と昵ちかづき近だというじゃあねえか。まあ、それはそれとして、お前は今の魚商さかなやと何をこそこそ話していたんだ」

お初は俯向いて立っていた。

「いや、隠しても知っている。おめえはあの魚商に知恵をつけて、隣り町の三吉のところへ相談に行けと云っていたろう。さつきも熊蔵が云った通り、その晩にあの七之助が天秤棒でおふくろをなぐり殺した。それをおめえは知っていながら、あいつを庇かばって三吉のところへ逃がしてやった。三吉がまた好い加減なことを云って白らばっくられて七之助を引つ

張つて来た。さあ、どうだ。この占うらないははずれたら銭は取らねえ。長屋じゆうの者はそれで誤魔化されるか知らねえが、おれ達が素直にそれを承知するんじやあねえ。七之助は勿論のことだが、一緒になつて芝居を打った三吉もお前も同類だ。片っ端から数珠じゆずつなぎにするからそう思つてくれ」

嵩にかかつて、嚇されたお初はわつと泣き出した。かれは土間に坐つて、堪忍してくれと拝んだ。

「次第によつたら堪忍してやるめえものでもねえが、お慈悲が願いたければ真つ直ぐに白状しろ。どうだ、おれが睨んだに相違あるめえ。おめえと三吉とが同腹ぐるになつて、七之助の兇状を庇つているんだらう」

「恐れ入りました」と、お初はふるえながら土に手をついた。

「恐れ入つたら正直に云つてくれ」と、半七は声をやわらげた。「そこで、あの七之助はなぜおふくろを殺したんだ。親孝行だというから、最初から巧んだ仕事じやあるめえが、なにか喧嘩でもしたのか」

「おふくろさんが猫になつたんです」と、お初は思い出しても慄然ぞつとするというように肩をすくめた。

半七は笑いながら眉を寄せた。

「ふむう。猫婆が猫になった……。それも何か芝居の筋書きじゃあねえか」

「いいえ。これはほんとうで、嘘も詐りも申し上げません。ここの家のおまきさんはまったく猫になったんです。その時にはわたくしもぞつとしました」

恐怖におののいている其の声にも顔色にも、詐りを包んでいるらしくないのは、多年の経験で半七にもよく判った。かれも釣り込まれてまじめになった。

「じゃあ、おまえもここの婆さんが猫になったのを見たのか」

確かに見たとお初は云った。

「それがこういう訳なんです。おまきさんの家に猫がたくさん飼ってある時分には、その猫に喰べさせるんだと云って、七之助さんは商売物のお魚を毎日幾尾ひきずつか残して、家へ帰っていたんです。そのうちに猫はみんな芝浦の海へほうり込まれてしまって、家には一匹もいなくなりましたんですけれど、おふくろさんはやっぱり今まで通りに魚を持って帰れと云うんだそうです。七之助さんはおとなしいから何でも素直にあいあいと云っていたんですけれど、良うちのひと人がそれを聞きました、そんな馬鹿な話はない、家にいもしない猫に高た価かい魚をたくさん持つて来るには及ばないから、もう止した方がいいと七之助さんに意見

しました」

「おふくろはその魚をどうしたんだらう」

「それは七之助さんにも判らないんだそうです。なんでも台所の戸棚のなかへ入れて置くと、あしたの朝までにはみんな失ななつてしまふんだそうで……。どういうわけか判らないと云つて、七之助さんも不思議がつているので、良人が意地をつけて、物は試しだ、魚を持たずに一度帰つてみる、おふくろがどうするかと……。七之助さんもとうとうその氣になつたと見えて、このあいだの夕方、神明様の御祭おまつり礼の済んだ明るる日の夕方に、わざと盤台を空からにして帰つて来たんです。わたくしも丁度そのときに買物に行つて、帰りに路地の角で逢つたもんですから、七之助さんと一緒に路地へはいつて来て、すぐに別れればよかつたんですが、きようは盤台が空になつているからおふくろさんがどうするかと思つて、門かどぐち口に立つてそつと覗いてみると、七之助さんは土間にはいつて盤台を卸しました。すると、おまきさんが奥から出て来て……。すぐに盤台の方をじろりと見て……。おや、きようはなんにも持つて来なかつたのかいと、こう云つたときに、おまきさんの顔が……。耳が押つ立つて、眼が光つて、口が裂けて……。まるで猫のようになつてしまつたんです」

その恐ろしい猫の顔が今でも覗いているかのように、お初は薄暗い奥を透かして息をの

み込んだ。半七も少し煙けむにまかれた。

「はて、変なことがあるもんだな。それからどうした」

「わたくしもびつくりしてはつと思つていますと、七之助さんはいきなり天秤棒を振りあげて、おふくろさんの脳天を一つ打ったんです。急所をひどく打ったと見えて、おまきさんは声も出さないうで土間へ転げ落ちて、もうそれ限りぎになってしまったようですから、わたくしは又びつくりしました。七之助さんは怖い顔をしてしばらくおふくろさんの死骸を眺めているようでしたが、急にまたうろたえたような風で、台所から出刃庖丁を持ち出して、今度は自分の喉を突こうとするらしいんです。もう打うち捨ちやつては置かれませんか、わたくしが駈け込んで止めました。そうして訳を訊きますと、七之助さんの眼にもやっぱりおふくろさんの顔が猫に見えたんだそうです。猫がいつの間にかおふくろさんを喰い殺して、おふくろさんに化けているんだろうと思つて、親孝行の七之助さんは親のかたきを取るつもりで、夢中ですぐに撲ぶち殺してしまつたんですが、殺して見るとやっぱりほんとうのおふくろさんで、尻尾しっぽも出さなければ毛も生えないんです。そうすると、どうしても親殺しですから、七之助さんも覚悟を決めたらしいんです」

「婆さんの顔がまったく猫に見えたのか」と、半七は再び念を押すと、お初は自分の眼に



も七之助の眼にも確かにそう見えたと言いつつ。さもなければ、ふだんから親孝行の七之助が親の頭へ手をあげる道理がないと云った。

「それでも其のうちに正体をあらわすかと思つて、死骸をしばらく見つめていましたが、おまきさんの顔はやつぱり人間の顔で、いつまで経つても猫にならないんです。どうしてあの時に猫のような怖い顔になったのか、どう考えても判りません。死んだ猫の魂がおまきさんに乗<sup>のりうつ</sup>憑<sup>つ</sup>つたんでしようかしら。それにしても七之助さんを親殺しにするのはあまり可哀そうですし、もともと良人が知恵をつけてこんなことになつたんですから、わたくしも七之助さんを無理になだめて、あの人がふだんから仲良くしている隣り町の三吉さんのところへ一緒に相談に行つたんですが、隣りは空<sup>あきだ</sup>店<sup>だな</sup>ですし、路地を出這入りする時にも好い塩梅に誰にも見付からなかつたんです。それから三吉さんがいろいろの知恵を貸してくれて、わたくしだけが一と足先へ歸つて、初めて死骸を見つけたように騒ぎ出したんです」

「それでみんな判つた。そこできようおれ達が繋がつて来たので、お前はなんだかおかしいぞと感づいて、さつき三吉のところへ相談に行つたんだな。そうして七之助の歸つて来るのを待つていて、これも三吉のところへ相談にやつたんだな。そうだろう。そこで其の

相談はどう決まった。七之助をどこへか逃がすつもりか。いや、おまえに訊いているよりも、すぐに三吉の方へ行こう」

半七は雨のなかを隣り町へ急いでゆくと、七之助はけさから一度も姿を見せないと三吉は云った。隠しているかとも疑ったが、まったくそうでもないらしいので、ふと或る事が半七の胸に浮かんだ。彼はそこを出て、更に麻布の寺へ追ってゆくと、おまきの墓の前には新しい卒塔婆そとばが雨にぬれているばかりで、そこらに人の影も見えなかった。

あくる日の朝、七之助の死骸が芝浦に浮いていた。それはちょうど長屋の人達がおまきの猫を沈めた所であった。

七之助はもう三吉のところに行かずに、まっすぐに死に場所を探しに行つたのであろう。いくらお初が証人に立つても、母の顔が猫にみえたという奇怪な事実を楯たてにして、親殺しの科とがを逃がれることはできない。磔はりつけ刑に逢わないうちに自滅した方が、いつそ本人の仕合わせであつたらうかと半七は思った。自分もまたこうした不運の親孝行息子に縄をかけない方が仕合わせであつたと思つた。

「お話はまあこういう筋なんですがね」と、半七老人はここで一と息ついた。「それから

だんだん調べてみましたが、七之助はまったく孝行者で、とても正気で親殺しなんぞする筈はないんです。隣りのお初という女も正直者で、嘘なんぞ吐くような女じゃありません。そうすると、まったくこの二人の眼にはおまきの顔が猫に見えたんでしよう。猫が乗憑のりうつったのかどうしたのか不思議なこともあるもんですね。それからおまきの家をあらためて見ますと、縁の下から腐った魚の骨がたくさん出ました。猫がいなくなった後も、おまきはやっぱりその食い物を縁の下へほうり込んでいたものと見えます。なんだか気味が悪いので、家主もとうとうその家を取り壊してしまつたそうですよ」



# 青空文庫情報

底本：「時代推理小説 半七捕物帳（一）」 光文社文庫、光文社

1985（昭和60）年11月20日初版1刷発行

入力：tatsuki

校正：山本奈津恵

1999年7月24日公開

2012年6月12日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 半七捕物帳

## 猫騒動

2020年 7月17日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 岡本綺堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>